

ミュージアム 通信

明治の文豪、 女性を描く ～その美と化粧～

[企業史展コラム5]
もうひとつの化粧史
—伊勢半グループ製品の今昔—

[かわら版]
館藏品 期間限定公開
講座のご案内

「見立昼夜廿四時之内 午後一時」豊原国周 画・
東京都立中央図書館特別文庫室所蔵
英語の書を読む、束髪的女性。左手中指と右手薬指に指輪が見える。



明治の文豪、女性を描く～その美と化粧～

漱石先生と明治の美人
慶応三年（一八六七）、大政奉還が行われ、明治時代の幕開けとなるこの年、江戸牛込馬場下横町（現・新宿区喜久井町）に夏目漱石が誕生する。江戸・明治・大正の三時代を生きた日本近代文学を代表するこの作家の偉大さを、いまさらあえて語る必要はないだろう。

昨年四月、朝日新聞紙上で『こころ』の再連載が始まった。この時より数えて百年前、大正三年（一九一四）に漱石が本作為新聞小説として発表、これを記念して始まった再連載である。漱石は、明治日本の急激な近代化に対する自身の考えを、小説の登場人物を介して語らせているが、今号では作中に時折見える明治期女性の化粧風俗について触れてみたい。漱石の審美眼がとらえた当時の女性の美とはどのようなものだったのだろうか。

「三四郎」にみる

「石膏」と「狐色」の化粧

明治四一年(一九〇八)

発表の「三四郎」は、九州の田舎から進学のために上京した小川三四郎が、これまでの自分の常識とはまるで異なる東京で、様々な人と出会い、交流を重ね、そして自由気ままな都会の女性里見美禰子に惹かれていく恋愛模様を描いた作品である。本作は冒頭から、女性の肌の色に例えて地方と都市部の相違を描き出す。

「三四郎は九州から山陽線に移って、だんだん京大阪へ近づいて来るうちに、女の色が次第に白くなるのでいつのまにか故郷を遠くのような哀れを感じていた。」

三四郎の故郷熊本では、適度に日に焼けた畑仕事の女性が珍しくなかったのに対し、京阪に近づくにつれ、肌の白い女性が増えていったのである。江戸時

代の頃より京阪の女性の化粧(白粉)は江戸のそれ

に比べても濃かったとい

うから、三四郎の目には殊

更に白く映つたのだらう。

のちに三四郎は、東京の

下駄屋で偶然見かけた店

番の娘の化粧を「まっ白に

塗り立てた(中略)石膏の

化物のよう」と嫌悪する。

そして同時に、美禰子の

「薄く餅をこがしたような

狐色」の「肌理が非常に細

かであった」肌を思い出し

て、「女の(肌の)色は、どう

してもあれでなくっては

だめだ」と断定する場面が

ある。さらに別の場面では、

美禰子の化粧について、

先の石膏娘とは異なり、「

本来の地(肌の色)を隠す

ほどに無趣味ではなかった

こと、また「こまやかな

肉が、ほどよく色づいて

いるその様を好ましく感

じている。これら一連の描

写を熊本育ちの三四郎ゆ

えの嗜好ととらえてもい

事情を汲むと、べつの側

面が見えてくる。

価値観・美意識の近代化

江戸時代は白粉に紅、

お歯黒、眉作り・剃り眉

という、いわば伝統的な

様式美が化粧のあるべき

姿だった。ところが、欧米

列強に追いつかんと近代

化政策を進める明治政府

にとつて、様式的化粧

風俗は旧時代の日本その

ものであった。明治元年

(一八六八)、まずは公卿に

対し、お歯黒と眉作りを

遵守せずとも良い旨を布

告、同三年(一八七〇)には

華族にもお歯黒・眉作り

を禁じた。同六年(一八七

三)、皇后をもつてしてお

歯黒を落とさせ、これを

機に白い歯を認めさせる

風潮へと導いていく。黒

ければ黒いほど美しいと

されたお歯黒の習慣を、

真逆に転換させようとする

この政策は、従来の価値

観・美意識を否定し、

近代のそれへと置換する

第一歩であった。

しかしながら上流階級

に始まった急激な転換は、

すぐさま一般庶民層にま

で波及し浸透するわけも

なく、お歯黒習慣の完全

なる撤廃を見るにはまだ

まだ時間を要する。漱石の

小説で描かれる女性は、中

流階級以上の夫人や令嬢

であることが多いが、彼女

らはたびたび「白い歯」を

覗かせており、お歯黒の消

えゆく過程の一端がここ

に読み取れよう。

同様に漱石は、その女性

の美しさ・意思の強さを

表すものとして、「目立つ

て黒い眉毛」や「眉毛の濃

い」など、眉の描写も欠か

さない。江戸時代において

は剃り落した眉跡に成熟

した女性美を見出してい

たというのに、明治三〇、

四〇年代にもなると太く

豊かな黒々とした眉が美人

像として重要になってい

る。さらに白粉に関して

も、健康障害を誘発する

危険性の高い従来の鉛製

(鉛白)から、害のない無鉛

製の白粉の開発・製造を

政府が奨励するようになる。

無鉛白粉の開発は、

明治期化粧品業界の潮

流のひとつである。その

上、白粉化粧による白い

肌を美しいとする固定

観念が西洋の化粧品の

輸入によって揺るがされ

始め、ついに明治三九年

(一九〇六)、「肉色」を謳っ

た白粉が登場する。素の

肌の色に近く、あるいは損

なわずして美しく見せよ

うとする化粧品の出現は、

日本女性の化粧に対する

意識の変化なくしては考

えられない。三四郎が嫌

悪した石膏のような旧

時代的化粧と、美禰子の

「狐色」の近代的化粧と

の対比には、自然な健康

美に目覚めた明治の化粧

観が投影されているとい

えよう。

旧時代は歌麿美人、 新時代は二重瞼美人

『三四郎』の美禰子、『それから』の三千代はともに二重瞼である。美禰子は「二重瞼の切長のちろついた恰好」、三千代は「美しい線を奇麗に重ねた鮮な二重瞼」かつ「眼の恰好は細長い」とある。現代人の感覚で二重瞼といえ、パッチリとした大きくて丸い目であるが、明治期の二重瞼美人は切れ長の魅力も備えていたようだ。日本製二重瞼とでもいおうか。加えて漱石は、長い睫毛も女性の目元の色香に不可欠な要素と見ていたのか、しばしば作中で触れている。

対し、西洋では大きな目は珍しくなく、そのなかで美的淘汰が行われてきたが、日本人の大多数は歌麿式であるから「大きな目に対する審美眼が発達しようがない」と言う。こういつた美的感覚の固定が背景にあって、画家は美禰子をモデルに絵を描くのだが、これによって美禰子の近代的な顔立ちの印象が一層引き立つようになっている。二重瞼もまた、明治期女性の美の象徴であった。

香水は都会美人の 必須アイテム

日本女性に白い肌以外の美意識を与えるきっかけとなった西洋の化粧品であるが、『三四郎』では舶来品を扱う大店の店頭で、香水を買いに来た美禰子と、それを成り行きで選ぶ羽目になる三四郎の姿が描かれる。三四郎が勧めたのは、フランスのロジェ・ガレ社製「ヘリオトロープ」であった。明治三〇〜四〇年代の西洋化粧品の輸入額を国別に見ると、フランスが他国に抜きん出て多い（次いでドイツ）。一例を挙げると、明治三八年（一九〇五）の「脂粉及び薫香類」の輸入総額三七万一千四百五円の内、二四万九千九百七円をフランスが占めている。ヘリオトロープの香りは、その後も三四郎を惑わす美禰子という存在を象徴的に描き出す。当時すでに国内でも香水の製品化が見られたが、外国製のそれにはいまだ質的に及ばなかった。なにして「仏国製を第一とし、和逸・米國これにつぎ、和製品は一番劣等」といわれていた頃である。当然、フランス製の香水が手頃な価格であるはずもなく、美禰子のように最先端のトレンドを楽しむことのできた女性に限られていただろう。美禰子は件の

香水を「ハンケチ」に吹きかけて持ち歩くが、ハンカチもまた明治以降の洋装文化が広まるなかで生まれた服飾小物である。

文豪作品の数だけ 美女がいる

今号で紹介したのは、あくまで夏目漱石の小説を通して見えてくる明治期化粧風俗の一端に過ぎない。紙面の都合上、触れずに終わった部分も多いが、文豪が描いた美女の数だけ、その時代の化粧観や審美眼、流行を知ることができるといえる。美女は我々にいろんなことを語ってくれるのだ。

※1 『三四郎』に続き『それから』も再連載中（二〇一五年四月時点）。
※2 京阪・江戸の化粧の濃淡については曲亭馬琴著「壬戌霧旅漫録」、京の女兒風俗の項を参照。
※3 明治三三年（一九〇〇）に鉛白の使用禁止となるが、製造が禁止されるのは昭和九年（一九三四）。
※4 農商務省商務局「重要輸入品総覧」（明治四二年刊）参照。
※5 東京衛生協会「美顔術独習」（明治四二年刊）参照。
※6 ちなみに『彼岸過迄』にも「手巾（はんけち）に振りかけた香水の香」という描写がある。

期間限定公開！

「キスミーの香水」2015年7月18日(土)～8月30日(日)

紅ミュージアムでは、館藏品「キスミーの香水」を公開します。伊勢半は昭和24年(1949)から香水の製造販売を開始しました。他の化粧品メーカーよりも遅い出だしとなりましたが、独自の製法やキャンペーンを展開し、瞬間にトップシェアとなります。今展では、製造・宣伝販促エピソードとともにデザイン性に富んだ昭和期の香水瓶を展覧します。

キスミー-特殊香水(キャラ)
昭和24年(1949)～・200円～



— 伊勢半グループ製品の

今昔

≪キスミー特殊香水≫

外国製香水が隆盛を極める
 昨今ではあるが、かつて国
 産の香水も各社がしのぎを
 削っていた時代がある。

香水発祥の地はエジプト

である。もともと香水は宗
 教的な目的で誕生し使用し
 たが、時代を経て、中世のフ
 ランスでは体臭を抑えるた
 めに利用された。当時、入浴
 すると病気になるやすいと
 信じられていたため入浴
 の習慣がなく、今日、フラ
 ンスで香水が発達したの
 は、体臭をごまかすため
 あったことによるものが大
 きい。

一方、日本で香水が一般
 化したのは戦後の昭和二
 ○年代前半(一九四五)で
 ある。明治時代にヨーロッパ
 から輸入された香水は
 高級品で、庶民がつけられ
 るものではなかったが、国
 内の化粧品メーカーから
 も香水が売り出され始め

ると徐々に一般にも広
 がっていった。香水がこの
 頃普及した理由も、家庭用
 風呂があまり普及してい
 なかったことから体臭を
 消すためであったという。

戦後直後の日本は、まず
 は皮膚を整え健康な状態
 に保つことが第一で、メイ
 クアップ化粧品よりも、
 セッケンやクリームなどが
 よく売れた。続いて口紅、白
 粉、ポマードなどの身だし
 なみに関する化粧品に
 人々の関心は移行し、さら
 に時代が落ち着いてくる
 と、目に見えるおしゃれか
 ら内面的なおしゃれに対
 しても意識が高まる。つま
 り、香水の時代が到来する。

昭和二四年(一九四九)
 五月、「口紅のキスミー」
 として名を馳せていたキ
 スミー化粧品本舗から香
 水(キヤラの香り)が発売
 された。すでに、様々な国
 内メーカーから香水が売



『婦人生活』昭和25年5月号掲載裏面1/4広告
 文中の「十年以前の熟成された…」とは、
 10年以上熟成されたの意。

り出されていたが、国産の
 香水は「さよなら香水」と
 揶揄されるほど香りの持
 続時間が短かった。

香水はアルコールと香
 料が含まれているので、
 酒類のように長期間醸造
 することによっていい香
 りが醸し出される。しか
 し、女性の必須アイテムで
 あった香水を長期間醸
 造しては生産が間に
 合わない。そこで、キス
 ミーが香水製造に乗り出
 した際に導入したのが、
 短期間で熟成可能な超短

波科学製造法である。合
 成香料工業大国である
 アメリカでは香水やク
 リームの製造に使用して
 いたが、日本でこの方法
 を取り入れたのは、キス
 ミーが最初であった。超

短波科学製造によりキ
 スミー香水は短期間で香
 りの持続する香水が大量
 生産でき、後発であった
 が飛ぶように売れた。かく
 して「さよなら香水」とい
 われていた国産香水も一
 目置かれる存在となっ
 たのである。

Information

かわら版

講座のご案内

■「夏休み子ども自由研究 紅ってなあに」
 ~紅のおはなし・紅の作り方・
 紅を塗ってみよう・紅を食べてみよう~

講師：当館学芸員
 2015年8月6日(木)①10:30~12:00 ②14:30~16:00
 ■対象学年：小学校3~4年生
 ■定員：各回10名(親子2人1組で5組) ■参加費：無料
 ※お問合せ・お申込みは紅ミュージアム(03-5467-3735)まで

Since 1825 伊勢半本店 ミュージアム

●開館時間/10:00~18:00 ●休館日/毎週月曜日
 (月曜日が祝日または振替休日の場合は、翌日が休館日となります)
 東京都港区南青山6-6-20 K's南青山ビル1F
 TEL&FAX:03-5467-3735
 東京メトロ銀座線・千代田線・半蔵門線「表参道」下車B1出口より徒歩12分
<http://www.isehanhonten.co.jp>